

テレビ番組の画面構成法

広島大学工学部教授 鈴木 充

はじめに

大学の「放送による公開講座」はラジオやテレビといったマス・メディアを利用して、大学における教育活動の一部を広く一般の受講希望者に提供するものである。そこに於いては、当然のことながら、より良い教育効果が求められるが、その内容が講義やゼミナールといった、大学における通常の教育方法と異なっているため、講師にとっては番組の制作に当たった当初から、教育効果を予測することがきわめて難しい。また、1大学が1年に一度講座を開設するという現在の制度下では、一人の教員が番組にかかわる回数は非常に少なく、経験を積むことによって、番組の構成方法を、より教育効果の高いものにするといった累積発的効果も期待できない。

そのような現状認識のうえで、放送による教育の効果をより高めるためには、少なくとも番組作成に未経験な講師に対して、基礎的なマニュアルを提供し、メディアの特性の理解を深めた上で、講義内容を構成することが必要であると考えられる。この研究の発端は、そのようなマニュアル作成の基礎作業として、制作された番組に対してさまざまな角度からの解析を試みて見ようとしたことにある。

一方、1991年からはラジオ、テレビとも一回当たりの放送時間が、30分に短縮される方向に向うことになった。このような時間短縮が、番組制作上、また教育効果上どのような問題を有するか、という点も番組制作研究には欠かせない関心事である。以上のような関心から1991年は45分番組、92年には30分番組を対象にして、番組制作技法の一側面を取りあげ、解析を試みた。

研究の目的と方法

今回の研究は、初めての試みであり、研究方法など、まだ手探りの段階である。そこで、とりあえず放送による講座がどのような画面構成を取っているか、ということを試験的に分析するため、画面の中でどのような教材がどの程度の頻度をもって使用されるか、ということを作成したビデオの中から抽出してみた。資料としては1990年度は平成元年度の放送大学の講座から、理科系、社会学系およびその中間と思われる3講座を選び、その第2講と第7講を取り上げ、広島大学の講座2講分との画面構成を比較した。ついで、1991年度は東北大学と名古屋大学の制作した番組各3本を取りあげ、同様の解析を試みたが、91年度は無作為に取り出した番組の選択が悪く、名古屋大学の一例は話だけの鼎談であったため、他の資料との比較が難しいため、事例から除き、対象番組は五本だけとなった。

画面構成の分析は、画面に写しだされているものにより「講師」「フリップ」「写真」「VTR」「板書」模型、実験等の「補助器具」およびタイトル等の「導入」「終了」に分け、それらの画面が写し出されている時間帯を秒単位で記録しスペクトル型の図を作成した。さらに、一

般に講義の内容は幾つかに分れているので、そのまとまりを矢印で表現した。もちろん、講義の内容は刻々と変化しており、ここに示したものは一つのめやすとして筆者の主観によるまとまりを示したものであり、厳密に分類したものではない。

45分番組の講義内容と画面構成

■ 1. 及び 2. は講師対面形式で1名の講師がテレビ・カメラに正対して講義を進める形式である。1. は特に物理学的な説明であるためか、図および数式を書いたフリップが多用され、全体で25枚に及ぶ。1枚のフリップに要する説明時間は割合に均等であり、あらかじめ講義内容と使用するフリップの整合関係をこまかく調整したものと思われる。画面構成は単調であり、切り換わりが多いが、論点が4項に整理されているため理解しやすい構成になっている。

■ 2. は1. と同じ講師の講義であるが、画面構成は1. とはかなり異なって、使用するフリップの枚数が少なく、画面の切り替えも少なくなって、同一画面が長く続く構成になっている。その原因としては、この回の講義が岩石と言う「物」を扱っているためかもしれない。他の一因はこの講義では岩石の説明のために現地取材を行ったVTRが2場面、約10分間挟まれていることである。VTRの画面では講師自身が画面中で解説を行っているが、対面形式の講義で、VTRの中からスタジオとは違った服装の本人の説明が出るのは異質に感じられる。

■ 3. 4. の講義の形態は1. 2. と同じ対面形式であるが、経済問題を扱ったためか、フリップ数枚とVTR2本を使用し、同一の画面が長く続き、画面の切り替えが少ないという特徴をもつ。しかし、1. では主任講師のスタジオでの講義の後で、他の講師に依頼して教室の黒板を使った講義を行い、講義室の雰囲気を与えようとした試みや、実社会の事例を会社訪問のインタビュー形式で行うなどの工夫を見せている。1. 2. に比べると大学における講義的な色彩が強い。

■ 5. 6. は家政学を扱ったものであるが、講師の「語り」を中心に対面式の講義を進めるという手法を取っている。したがってカメラの動き少なく淡々とした「語り」が続くが、その中で多少の小道具を使用することで変化を与えている。その一つは衣服の意味のところでは、パネルに要点を記入したカードを貼り足していく技法で、講師自身がこの動作をすることにより、固定したフリップの説明やコンピューター画面とは違った講義内容に集中できる動きになっている。5. の後段は夏目漱石の小説の登場人物の服装描写を通して衣服の意味を考えていくが、小道具として「我輩は猫である」の単行本を使い、その挿絵をズームやパンで見せることによって、講師の淡々ととした「語り」に視覚的な変化を与えている。6. も同様に「語り」を中心にした講義であるが、この篇では科学的な解説のため、フリップが提示される画面が多くなっている。しかし、1. に比べると切り替えの回数が少なく、また、人体模型を使った実験的試みを入れるなど、教室における講義色が強く出されている番組といえる。

■ 7. 8. は平成2年度の広島大学提供の番組である。講義の形式は講師とアナウンサー2名との対談形式を採っている。科学的な内容であるためか1. と同様にフリップや写真資料の使用が多く、画面の切り替わりが多くなっているが、対談的な雰囲気を出すため、同一フリップを使用している中でカメラを人物に切り替える回数が多く、従って講義的色彩は薄められている。2. の番組の中で注目したいのはアメリカにおけるコレステロール予防の説明に連続して

写真を使用した部分であり、スチール写真等を連続使用する技法は放送講座では場合によってはVTR使用により有効ではないかと考えられる。2本の番組とも講師に人を得た点もあって、見せる番組としては成功しているように思われるが、講師にかなり負担がかかる番組構成になっている。

30分番組の講義内容と画面構成

■9. 10. 11. は歴史を扱った講義である。9は3人の鼎談形式をとりながら、参加者の専門分野の紹介に力を入れている。専門分野についてはそれぞれ担当者が多数の写真、フリップを使用して説明を加える形を取っているが、短い時間内に詰めすぎた印象がある。10は担当講師が一人で対面型の講義を行っている。前半部分はフリップを多く使いVTRや写真を混ぜて、講師の映像はあまり画面に出ない構成になっている。しかし、後半になると使用する補助教材の数が少なくなり、画面は講師の上半身が続くようになる。全体に講義調の番組構成であり、受講者はかなり緊張感をもって聞かれたものと思われる。11は同じ歴史の内容で、一人の講師が全部を担当して対面型や講義を進めている。前半部は遺跡の紹介や発掘調査などの成果を見せるためVTR、や写真を使用しているが、後段は全体のまとめを兼ねてたためか、講師の映像が連続する形態になっている。

■12. 13は情報についての講座である。12. 13とも講師は一人であり、アナウンサーと対話形式の講義をしている。12の番組の特色は使用するフリップの枚数やVTRの回数がきわめて少なく、対話する人物映像の画面を占める割合が、非常に多い番組構成になっている点である。13は逆に各種の補助教材を駆使している例であり、VTRについては講師がスタジオで解説を加える他、録画部分に講師の期待する返事を予期したインタビュー画面を組込んでいる。また小道具としてパソコンを使用したパソコン通信を組込むなど、映像情報を豊かにする新しい工夫がいろいろと取り込まれている。

番組構成上の技法

(1) 講義の形式

- ①対面形式：講師がテレビ・カメラに直面して講義を進める形式であり、補助教材の使い方によっては、学習効果が高い方法であると考えられる。講師自身が第二カメラが写す教材や、時間の経過まで確かめて授業を進める必要があり、講師自身相当な緊張を必要とするが、聴講生もそれなりの緊張感をもって受講するものと思われる。45分番組では講師の負担が大きいが、30分番組ならば不慣れな講師でも対処出来るものと考えられる。
- ②対話形式：アナウンサーなり、進行係を交えて対談しながら講義を進める形式。進行にあまり気を使わなくてすむためか、大学制作の番組は、この形式を取るものが多い。しかし、講師が多数の聴講者が居ることを意識しないと、聴講者は他人の会話を聞いている感じで、話の内容に対する注意が散漫になる恐れがある。また、進行係の質問が多くなると、講師がインタビューを受けている感じになり、特に時間の短い30分番組では、充分注意する必要がある。
- ③座談会形式：専門の異なる講師の座談により、多角的に問題を理解させる形式。座談の時間

が短いと、出席者の知的背景が理解しづらく、30分番組での取組みはかなり難しくなるものと思われる。

- ④講義形式：教室の黒板に板書しながら、講義を進める教室での講義形式。とくに、板書される文章との関連で、講義内容が整理されて受講者に受入れられる。間にV T Rなどの補助教材を挟むと、効率の高い講義が行えるものと考えられるが、番組制作上難しいためか、実例はほとんどない。

(2) 補助教材

①フリップ

補助教材中、もっとも多く使われる。図、絵、文字およびそれらを組合わせたものがあるが、総合的に説明しようとして、多くの内容を一枚に盛り込むと、聴講者の目には、そこでは必要のない資料まで目にはいり、焦点がぼやけてしまうので、一枚の構成はできるだけ簡明にする方がよい。箇条書きの場合は5行程度が見やすい。また、概念の説明などでは、始めから全容が見えているよりは、後から付加されて行く方が、強く印象づけられる。このあたりが板書による授業の効果であると考えられるが、フリップでも項目をマグネット方式で加えてゆく方法があり、このほうが板書と同じように、視知覚により刺激を与える効果がある。また、同一のフリップを長時間、あるいは何回も使う例も見られるが、受講生の視覚的刺激が薄れるので、避ける方が賢明であろう。

②V T R

動きがある映像を送れるという点で、もっとも豊富な視覚情報を送ることができる。しかし、長所は逆に短所であり、講師が映像の内容を十分に説明しきれない場合は、受講者の思考に混乱を与えることになる。V T Rの活用方法として、講師がV T R中に登場して説明を加える方法があるが、周到な計画で望まないと、スタジオの講義のテンポと映像中の解説のテンポにずれが生じ、冗漫になる。特に30分番組では講義の流れはスタジオを中心にして、V T Rは映像資料として、スタジオで講師が説明する方式を取る方が無難であると思われる。

③写真

一般の大学の講義では視覚的な補助教材としては、O H Pとスライドが多用されていると考えられるが、写真（スライド）の利用頻度はそれほど多くない。V T Rの中に盛り込まれた情報の整理がつきにくいのにに対して、精選された写真の方が視覚情報を整理しやすい特徴がある。特に数枚の写真を連続して使用方法は、かなり効果的であると考えられる。

④補助器具

補助器具として用いられたものは、模型、書籍、テレビジョンなどであり、これらの器具を実験的に取り扱う例が見られた。一般的には補助器具を利用する場面は、あらかじめV T Rに収められている場合が多いようである。

45分番組と30分番組の総体的比較

ここで、45分番組の構成表と30分番組の構成表を総体的に比較してみよう。この二つの表をみて気付くことは、45分番組の補助教材が全体に均等に配られているのに対して、30分番組では後三分の一ではあまり多く使われていないことが挙げられる。これは講義例の選択の偏りに

よる面もあるが、講師や制作局の側に30分番組は時間が短い、という意識が過剰にある側面も起因していると考えられる。筆者の経験によるとリハーサルを行った場合、本番は幾分時間が短縮気味になる。45分番組では、最初の15分で時間配分を読み、つぎの15分でアナウンサーが時間調節を行い、最後の15分は事前に計画された時間配分に戻す、といった操作が可能であるが、30分番組ではその余裕がないので、20分頃までは流れにまかせ、最終的な時間調整は講師の語りにまかせる方法を取るために、このような時間配分になったものと見られる。

一方、講義内容は、45分番組では一回の講義に4～5回程度の話題のまとまりを与えている。30分番組では名古屋大学の場合は、二つまとまりから構成しているようであるが、前後二つの山の場合は、間で時間配分の調整をすることが難しくなる。したがって30分番組の場合でも10分間隔に、話題のまとまりを3回程度に設定しておいたほうが、講義を進め易くなるのではないかと考えられる。

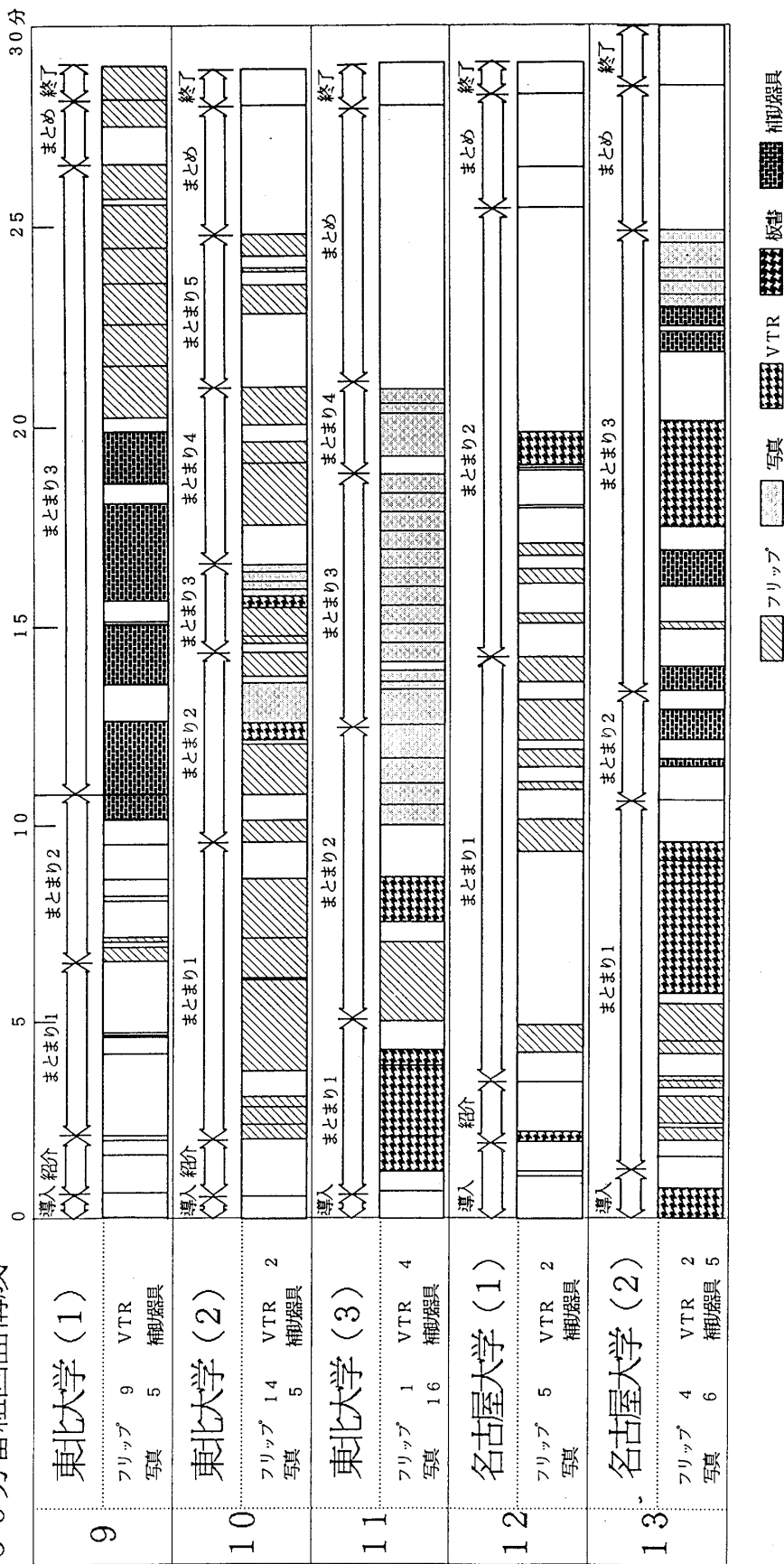
30分番組の画面構成技法

テレビによる30分番組はまだ始まったばかりであり、十分な検討を経た段階ではないが、これまでの考察から得られた30分番組構成技法はつぎのように結論づけられる。

- (1) 1回の講義は一つの主題のもとに、3回のまとまりのある話題から構成するようにする。
- (2) 画面に人物が写る割合は全体の三分の一以下であるから、補助教材はフリップや写真、VTR等を含めて、一つ1分以内として18点（二度使いを含む）程度を準備すると講義が進め易い。
- (3) 1枚のフリップはできるだけ簡略にまとめる。また、長時間使用するフリップは事前に完成されたものよりも、マグネット板を使用して必要事項を追加してゆく方式の方が、受講者の視覚的緊張を生みやすい。
- (4) VTRを使用する場合でも、その内容はスタジオにいる講師が同じ講義の流れの中で解説した方がよい。
- (5) 45分番組は一つの流れの中で処理することが難しいので、アナウンサーとの対話形式が望ましいが、30分番組では途中で時間調節をすることが難しく、始めから一つの流れで押切るかたちになるので、時間の有効利用と、受講者の緊張を保持する意味からも、講義の形式は対面型が適当であると考えられる。

放送講座は、講義の内容によって多様な番組構成方法が考えられるのであって、一つの方式にまとめられるものではないが、この方式はテレビへの出演経験ではなく、標準的な講義を行う場の参考としてまとめたものである。

30分番組画面構成



放送講座番組画面構成表

	0	5	1.0	1.5	2.0	2.5	3.0	3.5	4.0	4.5分
1	導入 内容紹介	地球の科学 I (2)	フリップ 2.5 写真 4	VTR 2 補助器具 -	引力	地球の形	地磁気	起潮力	終了	
2	導入	地球の科学 I (7)	フリップ 6 写真 2	VTR 3 補助器具 -	変成岩とは	変成岩の種類	まとめ	終了		
3	導入	マーケティング論 (2)	フリップ 3 写真 -	VTR 3 補助器具 -	マーケティング論の歴史	マーケティング論の概要	日本での歴史	現代的な事例	終了	
4	導入	マーケティング論 (7)	フリップ 4 写真 2	VTR 2 補助器具 -	価格の決め方	事例 (インタビュ)	事例 (インタビュ)	値引の仕組	終了	
5	導入	衣生活概論 (2)	フリップ 9 写真 4	VTR - 補助器具 5	衣服の歴史	衣服の意味	漱石の「猫」の中の服装と描写	漱石の書く服装と性格衣服と人間性	終了	
6	導入	衣生活概論 (7)	フリップ 1.4 写真 -	VTR - 補助器具 3	衣服の歴史	人体と熱	衣服の機能	体とのかかわりあい	終了	
7	導入	心と体の健康 (2)	フリップ 1.4 写真 5	VTR 1 補助器具 1	脳の大さ	脳の仕組	脳の検査	脳の発達	スキャナ 脳	健康 終了
8	導入	心と体の健康 (3)	フリップ 1.8 写真 6	VTR 1 補助器具 5	心臓疾患	原因	コレステロール	血圧	その他	終了

フリップ 写真 VTR 板書 補助器具